

---

# ジョージの終わり。

生成 環

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ジョージの終わり。

### 【Zコード】

Z3300D

### 【作者名】

生成 環

### 【あらすじ】

ジョージはいたずら好きの男の子。でも大晦日についた移動遊園地の老紳士に催眠術をかけられたジョージの生活がおおきく変わりました。

ある村にジョージといつ男の子がいました。

ジョージは村一番のいたずら好きの男の子でした。そのいたずらは、ハンスさんの牛に、赤い布を見せて暴れまわりハンスさんを困らせたり、マリーお婆さんが一生懸命育てたお花をわざと枯れ指したり、ピーター先生の自転車のサドルを盗み、サドルの代わりにカリフラワーを挿すといったいたずらをして村人たちを困らせていました。

大晦日のことです。村に移動遊園地がやってきました。

遊園地にはメリーゴーランドや観覧車やお化け屋敷や、小さいながらジェットコースターがありました。村の子供たちはもちろんのこと、大人たちもよろこんでいました。もちろんジョージもです。遊園地の舞台ではいろいろなショーがありました。自称東洋一の手品師やアラブのナイフ使い、ピエロやバレエダンサーが村人をよろこばしていました。

つぎに現れたのは、ボロボロのタキシードに、ボロボロのシルクハットの老紳士が舞台にあがってきました。

「わしゃ、この国で一番の催眠術師じゃ。このなかでわしの催眠術にかかる勇気がおるもののがいるか」

老紳士が言うと、たくさんの村人が手をあげた。ジョージも手をあげた。老紳士は手をあげた村人をテキトーにえらんだ。

「最後に、そこのボウズ。そう、おまえじや。おまえは勇氣があるかな」老紳士はジョージを指さした。

「あつたりまえだよ。おれさまはそんなインチキにダマされるもんか」ジョージは舞台にあがつた。

老紳士にえらばれたジョージたちは老紳士に横一列にならぶように言われ、ひとりづつ催眠術にかけていった。犬になれと言われたヘンリーさんは、犬のように四つん這いになつてワンと吠えた。水をブドウ酒だと催眠術にかけられたミランダ婦人は、よっぱらつてしまつた。ロバート議員にかけた催眠術はバレリーナだつた。それを見て観客の村人たちはおお笑いした。

「ボウズ、おまえが最後じゃ」老紳士がジョージに言いました。

「へへへ……。そんなインチキにかかるワケないじやん」

「そんな減らず口をたたくのはいまだけだぞ。ではボウズ、目をつぶるのじや」

ジョージは目を閉じるふりをしました。なにもしらない老紳士はジョージに催眠術をかけようとすると、ジョージはポケットにかくした花火に火をつけ、老紳士の足もとに花火を投げました。

「ウアツ、アツチツチ」

おどろいて舞台から転げ落ちた老紳士。それを見て笑うジョージと村人たち。

「このクソボウズめ」老紳士はジョージに詰めよつて言いました。

「明日からおまえは女の子じや。あやまつても許さんからな」老紳士は去つていきました。

「ジョージ、あのじいさんマジだつたぜ」友達のマイケルが言いました。

「心配するなつて。おれがそんなインチキにかかるかよ」

「もしジョージが女の子になつたら、俺がジョージの恋人になつてやるよ」ジョージよりひとつ年上のアレックスが言いました。

「じゃあ私はジョージのお姉さんになつてあげるわ」同級生のオードリーが言つと、ジョージは心配するなつてと言つて笑いました。みんなもジョージにつられて笑いました。

それがジョージの男として過ごした最後の年となつたのです。

オードリーの家の玄関をドンドンと叩く音がしました。オードリーは玄関のドアを開けると外は雪が積もっていました。

玄関の前にはジョージが立っていました。オードリーはおどろきました。なぜなら、ジョージは女の子の服を着ていたからです。

「ジョージ、その恰好だつしたの」オードリーの間にジョージはもじもじしながら言いました。

「わからないわ。朝起きて気がついたら、こんな服を着ていたの…」

…

「ジョージ、外は寒いから中にはこりつ」オードリーはジョージを家にいました。オードリーは、ジョージをイスに座らせて待つよう言つと、オードリーは台所にいきスープを持つてジョージのところへ持つていきました。

ジョージの待つ部屋に戻つたオードリーは、ジョージがひざをそろえて行儀よく座るのを見てスープを落としました。  
「やっぱり、あの老紳士のいったことは、ほんとなんだ」ショックで顔が真つ青になつたジョージ。とうとうジョージは泣きだしてし

まごました。

「ジヨーヌ……」オードリーは女性的なジヨーヌを見てシックを受けました。

一階からオードリーの姉のベローカが降りてきました。ベローカは、新年の朝だというのに、オードリーの声がつむせいから文句を言おうとして降りてきたのです。

「わよっとホーデリー、なに騒いでいるの。それになによ、この床。なんでこんなヒヤハヤの」

「「！」みんなさー。ベローカお姉さん」あやまつたのはジヨーヌだでした。

「「！」あんですんだら……わよっとホーデリー、！」ただれなの」

「ベローカ姉さん、！」のトロジヨーヌなのよ。ジヨーヌ、！」の雪だから移動遊園地はまだ片付けるのが遅れると黙つたり、せやくいきましょ。姉さん、床そうじお願ひね」オードリーはジヨーヌの手をひっぱつて外に飛びだしてきました。

ジヨーヌは、移動遊園地につくまで、オードリー！」ままでの！」と話をしました。

朝ジヨーヌが起きて着替えると、ジヨーヌはトイレにはこりました。気がつくとジヨーヌは座つて用をたしていた。トイレから出たジヨーヌは服を見ました。それは女の子の服だったのです。

母親のアイリーンは、ぼうぜんと立っているジヨーヌに声をかけました。

「エバジニア・ファー、その服はジニー・ファーのために買つたのよ」

「なに言つてゐるのママ、わたしの姉前まジヨージ……よ」ジヨージは、昨日の老紳士の言つたことを思いだしました。だがアイリーンの言つたことがジョージが頭に直撃したのです。

「遊園地にいた催眠術使いの老紳士に頼んで正解だったわ」

「ねえママ、それつてどうこいつことなの……」

「わたしとお父さんは、ジエニーファー、あなたがいたずらばかりするからわたしたちは村の人たちから苦情がいつぱいきてるの。そのことを村長に相談したら、大晦日にくる移動遊園地の園長と知り合ひだといつのよ」

「まさか……」

「やうよ。園長に相談したら、ちよづき催眠術使いを雇つたからと言つて。私たちは催眠術使いに頼んであなたの性を替えてもらつたの。でもすごいわねー。だつて完璧な女の子になつたから」

「ひどいよママ……。わたしがどうしたらいこのよ」ジョージはアイリーンを押しのけると、外に飛びだしていきました。

「それで、わたしの家にきたのね」オードリーは言いました。

「オードリー、あの老紳士さん、わたしのことを許してくれるかし

ジョージとオードリーが移動遊園地に近づいてきたが、遊園地は

撤収作業の途中で、もうすぐ遊園地が片付けられるといひでした。

「すみません。あのう、昨日いた催眠術使いの老紳士はどうい

ますかあー」 オードリーは撤収作業している遊園地の作業員たち

に聞こえるように大声で言いました。

「お嬢ちゃんたち、あそこにいる園長に聞いてみたらどうだい」 ヒ

ゲをはやした作業員が言いました。

「ありがとうございます、おじさん」 オードリーは作業員に礼を言いました。

「あのおじさん、わたしのことをお嬢ちゃんと言つた……」 ジョージは少しづつだが女の子らしくなってきているのがいやになつてきました。

「そんなことないよ。ジョージはずいぶん女の子らしくわよ」

「オードリー、からかわないでちょうどいい。ねえオードリー、あれこれいふのが園長さんじゃないかしら」

ジョージは遊園地の園長に催眠術使いの老紳士はどうなるのか聞いた。でも園長は、催眠術使にはもう出ていったあとだとジョージに言つたのでした。

この村から移動遊園地が出ていったのを見送ったジョージとオードリー。帰り道をとぼとぼ歩くジョージに、オードリーは昨日のことを話しだした。

「ジョージは、昨日わたしが言つたことを覚えてるかな

「たしかオードリーは、わたしが女の子になつたらお姉さんになると言つてた……」 ジョージは昨日のことを思い出したのです。

「だからいまからわたしがジョージ、うつむく。ジョニーファーのお姉ちゃんになるの。ジョニーファーは今日からわたしの妹」

「オードリー、なに言つてゐるの」ジョージは、オードリーがジョークを言つてゐるのかと思いました。

「ジョニーファー。また雪が降つてきたから、わたしの家にいきましょ」オードリーはジョージをジョニーファーと呼びました。

「これが、あのボウズの男らしさの玉か。これほどキレイな玉はめつたにないのう。それほどあのボウズは男らしかつたんじやな」老紳士はカバンを開けた。カバンの中にはたくさん玉がはいつていました。

老紳士は、ジョージの男らしさの玉をカバンに入れると、カバンの中にはあった水晶玉をだしてきました。

老紳士は水晶玉に呪文を唱えた。すると、ジョージとオードリーのふたりがいる部屋が映つていました。映つていた部屋は、オードリーの部屋でした。ジョージは、オードリーの部屋にある大鏡に移つている女性の服を着た自分の姿に、顔を赤らめてウットリしているのが見えました。

「替わりにいれた女らしさの玉が、ボウズをもつと女らしくさせるじゃねえ」老紳士は水晶玉をカバンの中にいれると、カバンを荷物棚のうえに乗せました。

「」の移動遊園地もあきたのう。つぎは同じに行つつかのう。とりあえず寝ようかのう。おつと、その前にじつはをしまわなくては

老紳士はズボンを脱ぎ、しつぽを後ろにまわしました。しつぽの先端は三叉になっていて、まるで悪魔のしつぽみたいだつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3300d/>

---

ジョージの終わり。

2010年10月12日06時41分発行